

<学位論文>

色彩の感受に基づく表現が  
新しい価値に向かう態度に与える影響の研究

公聴会資料

---

令和4年2月12日 於 オンライン ZOOM 開催

兵庫教育大学大学院  
連合学校教育学研究科  
教科教育実践学専攻  
( 岡山大学 )

D19602K 松浦 藍

## 研究の要旨

本研究に至った筆者の問題意識の発端は、筆者の所属校の生徒の中に、自分自身が知覚した経験を伴わない、一般化された情報から思考したり、判断したり、表現したりすることに偏重する者が多いことの実感からであった。それは、Hunt が述べた学習への内発的動機付けをする際の、「知覚と環境の相互作用」と「情報処理と行為」が、並列な関係として存在するという主張とは相反した状況だったと言えよう。そして、この二つの視座の内、「情報処理と行為」に偏ることにより、自分自身が感じ取った価値よりも、自分以外の誰かが価値づけた「一般化された情報」のみを求めることにつながる可能性が危惧される。また、上記のような状況が生まれる背景として、社会生活を送る上で自分自身が知覚したことを表出しにくい生活環境であったことも、懸念されるもう一つの問題である。以上の状況下では、日常から感じ取ったことを基にして、主体的に新しい価値に向かう態度で生活を送ることは困難である可能性が高い。そして、生徒一人ひとりが、感受したことを基に新しい価値に向かう態度を岡田猛は「創造性」という言葉を用いて論じている。

以上のことを踏まえ、本研究において二つの課題を追究することとした。まず「課題①」は、「知覚と環境の相互作用」と「情報処理と行為」の視座からの造形行為を行うようになる学習プログラムの開発と検討である。もう一つの、「課題②」は、「課題①」で開発したプログラムによって、生徒が新しい価値に向かう態度が高まっているかを測る尺度の開発とその検証である。

研究の方法として、「課題①」では、中学生を対象とした感覚知覚による色彩の感受が鑑賞活動や表現活動に与える影響の調査(第2章から第5章)を行い、「課題②」では、色彩の感受と新しい価値に向かう態度との関係に与える影響の調査(第6、7章)を行った。

そして、序章において、本研究の課題を達成するために必要となる方法として、色彩の感受と創造性の育成を挙げた。そのため、第1章では、色彩の感受と創造性に関する先行研究から、本研究の位置づけを行った。

第2章では、絵画鑑賞での感想を主に名詞の羅列で述べるなど、一般化された情報を読み取る傾向がある生徒に、「知覚と環境の相互作用」を促す色彩からの感受に重きを置いた学色彩感情効果学習を行い、絵画作品の主題に関する記述の語句の種類と数を集計した。その結果、色彩の感受を繰り返す学習活動は、「知覚と環境の相互作用」と「情報処理と行為」の二つの視座から、絵画鑑賞をするようになる効果があることが分かった。

第3章では、表現活動においても、色彩の感受に重きを置いた学習プログラムを同じ生徒に実施する。第2章の結果を受け、色彩の感受が絵画作品の鑑賞活動と同様、「知覚と環境

の相互作用」と「情報処理と行為」の視座から表現するようになるのかを検証するためである。学習プログラム実施に対する調査では、色彩感情効果を経験した生徒と未経験の生徒とが自画像を制作する際に、自分の外見とは異なっても想像したことを表すことと、自分の外見を再現することのどちらを重視するかを集計した。その結果、色彩の感受による学習によって、「知覚と環境の相互作用」と「情報処理と行為」の両方を基にした表現主題に向かい、かつ、その態度が持続する効果があることが分かった。

第2章と第3章での学習プログラムは、色彩の感受することに特化したものである。そのため、「知覚と環境の相互作用」だけでなく、色彩についての知識を習得する「情報処理と行為」に基づく学習が造形行為に与える影響について検討するために、第4章では、色彩感情効果学習と、色彩に関する知識を習得する学習(以下、カラーシステム学習と表記)を並行した学習プログラムを実施した。学習プログラムの構成の違いにより調査は、二つに分けた。一つ目の調査(以下、調査aと表記)は、生徒が色彩感情効果学習もしくはカラーシステム学習だけを経験する。調査aの結果から、色彩感情効果学習のメリットは、表現主題から多くのことを想像し、多様な表現に向かう姿勢を強める効果があることで、デメリットは、自分の感覚とはそぐわない色は使わないままになることであった。そして、カラーシステム学習のメリットは、知識を活用して多くの色数を用いて表現する効果があることで、デメリットは、想像することからの作品の表現主題が弱くなることであった。

もう一つの調査(以下、調査bと表記)では、二つの学習をどちらも経験するため、二つの学習の経験順も重視した。一つ目は、調査対象の生徒について、色彩の感受から経験することは、知識の習得を先に経験するよりも、「知覚と環境の相互作用」を行い、多くのことを想像し、「情報処理と行為」を行って様々な色や技法を用いて表現に向かう姿勢を高める効果があることだった。二つ目は、調査対象の生徒について、二つの学習プログラムを経験すると、それぞれの学習プログラムのデメリットを補うことができることである。

第5章では、視覚以外の知覚を併せた色彩の感受が造形行為に与える影響と、繰り返し色彩の感受を経験することが与える影響についても明らかにすることを目指す。そのため、視覚のみの学習プログラムと、視覚以外の感覚を相互作用させて色彩の感受する学習プログラムを実施し、生徒の制作状況を調査した。その結果、相互作用させるために視覚以外の感覚を加えた学習プログラムでは、加えた感覚、つまり触覚、聴覚、嗅覚に応じて想像する内容が多様に変化するようになり、言葉ではなく、色使いや描画方法など、使用する造形技法も増やそうとする姿勢を高める効果があることが分かった。

第6章では、個人にとっての新しい価値に向かう「mini-c」が培われているのかを検証するため、個人にとっての新しい価値に向かう態度が高まっているのかを測る尺度を作成し、地域が異なる複数の中学校でのアンケートを実施した。そして、アンケート調査結果とカリキュラムの関係を検討し、作成した尺度の妥当性を検証を行った。その結果、創造的態度尺度には、妥当性があり、カリキュラムの検討を行うための尺度として活用できることが分かった。

第7章「色彩の感覚知覚による表現と新しい価値に向かう姿勢の関係についての調査」では、制作前、途中、後に、創造的態度尺度に基づいた授業アンケートを実施し、生徒の作品の制作状況について調査を行った。創造的態度尺度と作品の制作状況との結果から、色彩を扱う学習活動が新しい価値に向かう態度に影響を与えることを調査した。一つ目は、調査対象の生徒について、創造的態度尺度の結果から、色彩の感受に重きを置く学習プログラムを繰り返し経験すれば、「知覚と環境の相互作用」と「情報処理と行為」が両方を意識して表現されるとともに、新しい価値に向かう態度も強まるようになる傾向が見られることが分かった。二つ目は、調査対象の生徒について、自分にとっての美しさを求めることで、新しい価値に向かう態度を自身で育てやすくなることが分かった。

以上の調査を踏まえて、調査対象の生徒について、色彩の感受が新しい価値に向かう態度に与える影響について、以下の2点の効果があることを確認することができた。

①「知覚と環境の相互作用」と「情報処理と行為」の両方の視座を持って表現活動、鑑賞活動に向かうように育むための一つの方法として、色彩の感受が有効である

②色彩に関する本学習プログラムの経験し、かつ、自分にとっての美しさを求める生徒ならば、新しい価値へ向かう態度を強める効果がある

そして、それぞれ、課題①と課題②に呼応する、本研究での達成した結論である。

## スライド資料

---